

63. 忍頂寺

賀峯山^{かぶさん}忍頂寺^{にんちょうじ} 宗派 高野山真言宗

茨木市忍頂寺258番地

『賀峯山忍頂寺縁起』によれば、忍頂寺の開基は行基菩薩(ぎょうきぼさつ)とあり、また開成(かいじょう)皇子ともあるが、長年の間に廃滅に帰した。後年、勝尾寺第三世證道上人(しょうどうしやうにん)の弟子である参忠上人(さんちゆうしやうにん)が仁寿元年(851年)に再建したとある。

また、『日本三代実録』には【傳燈満位僧三澄(でんとうまんいそうさんちやう)が国家の安寧(あんねい)を祈願し建立した神岑山寺(かぶさんじ)があり、春には最勝王経、秋には法華経の講説を行っていた。その神岑山寺が、貞観2年(860年)9月20日、清和天皇の御願寺となり、忍頂山の寺号を賜った】とある。なお、『賀峯山忍頂寺縁起』で記されている、忍頂寺を中興したと言う参忠上人は、『日本三代実録』にある僧三澄と同一人と思われる。

鎌倉時代、西大寺の興正菩薩叡尊(こうしやうぼさつえいそん)が忍頂寺を訪れ、弘安6年(1283年)10月16日、当寺の薬師堂に於いて三百三十四人に菩薩戒(ぼさつかい)を授けたと、叡尊の自著『感身覺正記』に記載されてある。

その当時、忍頂寺は山巔(さんてん 山のいただき)に建てられ、三十余の僧坊を擁(よう)する山岳寺院で、勝尾寺(箕面)、神峰山寺(高槻)、本山寺(高槻)とともに修行道場としてかなりの規模を備えた伽藍であった。そして、国家の隆盛を祈願するために春は最勝王経を秋には法華経を唱え、多くの衆徒(しゅと)を抱え栄えていた。

寛政10年(1798年)に書かれた『撰津名所圖會』に【忍頂寺は忍頂寺山の麓にあり、壽命院と号す。真言宗。いにしえは山峰にあり】とある。現在の忍頂寺の境内地にある五輪塔(大阪府指定文化財)の台石に、元享辛酉七月十五日と刻されていることから、元享元年(1321年)には、既に現在地に忍頂寺が移っていたとも推測できるが、詳細は不明である。

鎌倉時代、忍頂寺は京都御室の仁和寺(にんなじ)の支配のもとに田地を開発し寺領の拡大発展が図られた。そのために勝尾寺との間で所領争いが絶えなかった。永禄年中(1558年～1569年)には織田信長など時の執政者の保護を受けていたが、天正年中(1573年～1592年)、高山右近が切支丹宗(きりしたんしゅう)の伝播(でんぱ)のため、堂宇(どうう)を焼かれ、一時、本尊の薬師如来立像は丹波国柏原(現在 亀岡市東別院)に避難し、寺院は廃滅に近い状態となった。

高山右近書状『壽命院文書』によれば、右近は忍頂寺を保護したと綴られている。また、カトリック教会の宣教師ルイス・フロイスが顕した『日本史』には、忍頂寺は教会にされていたと記されてあるが、実史とは些か乖離(かいり)する。

『賀峯山忍頂寺縁起』に【寛永21年(1644年)、勝尾寺石橋院の榮尊(えいそん)が丹波国柏原におもむいたとき、忍頂寺舊蔵(きゅうぞう)の薬師如来立像を見つけ、その靈感のあらたか

さを、身をもって感じた。それが機縁となり忍頂寺の再興に努め、中興の祖となった】とある。これを証すように本尊の台座に、慶安4年(1651年)、榮尊による再建造立銘と記されている。

その後、中興三世院宥信(ゆうしん)も、領主小田切土佐守などの協力を得て、元禄4年(1691年)には不動堂を建立するなど復興を行った。

その後、衰微を重ねるが中興後の寺史を知る記録は散逸して詳細を探る由もない。往年の寺領であった寿命院跡を継承し、山号を賀峰山、寺号を忍頂寺として栄光衰勢を重ね、大正後期、勝尾寺第百二十世隆筵和尚が再建、現在に至っている。

平安時代後期、博学であった貴族の三善為康(みよしためやす)が著した『捨遺往生傳(しゅういおうじょうでん)』には、忍頂寺の大法師源因の念仏往生伝が記載されている。この源因は法華経を信じ、仏の導きで極楽浄土に往生することを願い、毎日かかさず法華経をととなえていた。ある日、「今年中に死ぬであろう」と夢でお告げがあった。しかし、その年の大晦日になっても健在であり仏のお告げにあやかりたいと願い、大晦日の夜、焼身自殺をして極楽浄土に旅立ったとの物語で、源因法師は法華経をととなえる究極の行者として描かれている。

このような伝承は、江戸時代、念仏によって往生を願う、浄土信仰の影響を強く受けた僧侶が忍頂寺にいたことを物語っている。

また、忍頂寺には『空を飛んだ薬師如来』という物語も村伝として語り継がれている。それは、元暦元年(1184年)正月30日の朝、忍頂寺が火災で焼けたとき、本尊の薬師如来が空を飛んで避難をした、という口伝である。

この薬師如来は秘仏で本堂内の厨子の中に安置され、厨子の前には本尊より少し小さい御前立(おんまえたち)の薬師如来立像が安置されている。(竹村弘教住職筆)

寺院創建 清和天皇の御世、僧三澄が国家の安泰を祈願し建立した。そして、神岑山寺と称し、山岳寺院で修行道場としてかなりな規模を備えた伽藍であった。

貞観2年(860年)、清和天皇より忍頂寺の寺号を下賜(かし)、勅願寺となる。天正(1573年～)の始め切支丹宗伝播のため、廃滅に近い状態となった。寛永年間(1624年～1644年)、勝尾寺石橋院の榮尊が中興の祖として再興を図る。

その後、中興三世宥信も、不動堂を建立するなど、復興に努めた。時代と共に、星霜(せいそう)を経て衰退し、大正後期、勝尾寺第百二十世隆筵和尚が再建した。

本尊 薬師如来立像 木造 像高 92.5cm 平安時代作 秘仏本尊

主たる什物

◎ 薬師如来立像 木造 像高 66.6cm 室町～桃山時代作 本尊御前立仏

◎ 日光・月光菩薩立像 式軀 木造 日光像高 70.5cm 像高月光 67.5cm

江戸時代作 本尊脇侍(きょうじ)

- ◎ 十二神将立像 十式軀 木造 像高 52.8cm～57.9cm
室町～江戸時代作 本尊の眷属(けんぞく)
- ◎ 聖観音菩薩立像 木造像高 162.3cm 平安時代作 観音堂本尊
- ◎ 不動明王座像 木造 像高 67.1cm 鎌倉時代作
- ◎ 弘法大師座像 木造 像高 47.0cm 江戸時代作
- ◎ 毘沙門天立像 木造 像高 93.8cm 平安時代作
- ◎ 将軍地藏菩薩立像 木造 像高 94.2cm 室町～桃山時代作
- ◎ 阿弥陀如来坐像 木造 像高 39.0cm 南北朝～室町時代作
- ◎ 千手観音像・二仏立像 参軀 木造
千手像高 30.0cm 左脇侍像高 27.5cm 右脇侍像高 27.7cm 江戸時代作
- ◎ その他仏像 十参軀

- 建 造 物** 本 堂 薬師如来立像を本尊、大正 15 年建築
 観音堂 聖観音菩薩を本尊 摂津第二十三番霊場 明治 32 年建築
 鐘 楼 第二室戸台風で崩壊、信者が昭和 38 年に鉄骨で再建し寄進鐘楼は寛文 4 年(1321 年)作、梵鐘表面に寺史が刻されてある。
 五輪塔 元享元年(1321 年)作、総高 230cm、大阪府指定文化財
 石燈籠 本堂前に石灯籠、総高 263cm、中台、基礎は鎌倉時代、かさ、火袋竿は江戸時代初期作。火袋に十字の格子があることから、キリシタン燈籠であると語られている。
- 法要・行事** 年始(1 月 4 日)、節分(2 月 3 日)、御影供(4 月 21 日)、棚経(8 月 14 日)、施餓鬼会(8 月 23 日)
- 住 職** 竹村弘教(たけむら こうきょう)住職。昭和 60 年、第二十九世住職に就任
 中興の祖である榮尊から住職は起算され、現住職は二十九世。昭和初期頃、忍頂寺の住職は、勝尾寺の住職が兼務していた。そのため、寺院としての記録等が散逸して詳細を探る由もないと語られ、本堂に安置されている多くの仏像を拝し、忍頂寺の貴重な寺史を紐解くのが住職の日々とのこと。